

学習場面に応じた社会科授業案づくり
～ 集団の中で主体的に学習し高めあう授業をめざして

宜野湾市立普天間中学校教諭 伊波 優志

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究の方法と目標	2
III	研究仮説	2
IV	研究の全体構想図	3
V	研究内容	4
1	研究内容の概要	4
2	教科授業案の作成	4
(1)	教科指導計画	5
(2)	地域教材の捉え方	5
(3)	学習指導計画	5
(4)	単元指導計画の作成	5
(5)	授業展開案	6
(6)	学習集団理解（生徒理解）	6
(7)	学習活動の提示と評価方法の提示	6
3	授業技術	7
(1)	授業技術の定義	7
(2)	発問	7
(3)	発問づくり	8
(4)	提示	9
4	人間関係づくり	9
5	先行授業	10
6	検証授業	10
(1)	検証授業1	10
(2)	検証授業2	12
VI	研究のまとめ	22
1	具体的項目の取り組み成果	22
2	研究仮説への成果と課題	22
VII	研究報告を終えるにあたり	23
	《引用文献》	23

学習場面に応じた社会科授業案づくり
～集団の中で主体的に学習し高めあう授業をめざして～

普天間中学校教諭 伊波 優志

Ⅰ テーマ設定理由

現代社会はめまぐるしく変化し、子どもはもちろん大人でさえ人生の選択に悩む時代となった。大手企業の倒産や合併、新事業の成功、多岐にわたる流行やライフスタイルの変化などが、私たちの暮らしや価値観に影響を与え、多様な生き方を可能にさせた。加えて、長引く経済不安や今までになかった事件や事故の発生や社会問題、国際社会の変化などが、将来を予測しがたい状況にしている。そして、繁多な情報とさまざまな価値観や多様な生き方が提示される情報化社会の中で、外見や一時の成功にとらわれた選択的な生き方をする子どもが増えた。豊かな人間性を育む時期に、自分自身を見つめながら自己実現について深く考えることが少なくなった。

このような社会状況の中、子どもに、豊かな人間性や社会性を身につけさせるとともに、自ら学び、自ら考え、社会変化に主体的に対応できる資質や能力の育成を目指し、平成 10 年に学習指導要領の改訂が行われ、14 年度に実施された。

学習指導要領における社会科の改定基本方針は、内容の厳選、学び方の学習、社会変化への対応、3 分野関連項目の設定、の 4 点に集約される。このことについては、以下のよう

に段階的に理解することができる。

指導の観点からは「社会的事象を、学習過程を重視しながら、地理、歴史、公民学習を踏まえ、総合的にとらえさせる」ことが重視され、指導の場面では「教材を開発し、多様な学習方法を体験させ、諸事象や将来社会について生徒に正しい認識を持たせる授業づくりを行う」ことが強調された。言い換えるなら「教師は、見通しを持った指導計画をたてて、さまざまな学習活動を準備し工夫ある授業実践を行い、事実認識の方法や社会変化に対応できる力を育成する」ことが使命となる。さらに、社会科は、このような学習指導を通して、「・・・民主的・平和的な国家の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」という教科目標の達成を狙うものであり、社会科教師として責務を感じる。

これらのことを受けて、学校では、「生きる力」として「確かな学力」、「豊かな人間性」「健康・体力」の育成を図る教育活動を展開している。例えば、「確かな学力」については、今回の改定で重視された「自ら学び、自ら考える力」の育成を目指し、「生徒が主体的に学習する授業」としてさまざまな工夫・改善が取り組まれてきた。ちなみに問題解決的学習やポートフォリオ評価などは、各教科の実践の中で生かされている。また、「豊かな人間性」を育むため、学習集団理解を基に行われる授業展開やグループ学習などで、グループ編成や学習リーダーの活用について工夫を凝らした授業展開を行ってきた。これらについて、もう一步踏み込んで考えるなら、「授業」は、教師と生徒、生徒と生徒の人間関係の中で行われるものだから、その関係づくりも大切である。しかしながら、最近の子どもたちは人間関係作りがうまくできないとの声をよく耳にする。社会性を育てる基盤としても、人間関係作りを授業の中で培うことは重要であろう。また、授業では、教科の専門的内容が参加者の人間関係と相互作用しながら展開する。これを上手にコーディネートすることが「豊

かな人間性」、「確かな学力」の育成を目指した授業実践になると考える。また、社会科の目標が、「～公民的資質の基礎を養う」であり、改定基本方針の趣旨から考えても、学習指導を通して人間関係作りを行うことは、社会科学学習の一環と捉えることもできるだろう。

このようなことから、「豊かな人間性」、「確かな学力」の育成を念頭において、学習場面を、単に授業展開や学習活動の各場面のみならず、学習形態や学習集団の状況、生徒個人の状況も含むものと捉え、生徒個人が積極的に学ぶ意欲を持ち続けながら学習し、互いに高めあえる関係を培うことができる授業案作り、というテーマを設定した。

II 研究の方法と目標

研究の柱を、「学習場面に応じた指導の選択」「集団の中で生徒が主体的に学習できる活動」の二つとし、主な研究実践内容を以下の四点とする

- 1 社会科授業の基本技術（発問、活動、指示など）充実を図る
- 2 さまざまな学習場面に応じた効果的な学習活動を探究する。
- 3 ねらい（単元内容別）に応じた効果的な、授業技術、学習活動、教材の組み合わせや配列を研究する。
- 4 授業実践と分析、検証を行い、授業案作成とそれに関わる指導計画の構造化を図る。
（地理、歴史、公民について先行授業、検証授業、研究授業を行いたい）

研究活動は、理論研究に偏らないよう、授業実践を行い、検証、分析を繰り返し、実践資料を基にしながら研究を進め、さまざまな場面に応じた学習活動の展開例や授業案を少しでも多く作りたい。また、授業技術、学習活動、教材の組み合わせを基本的な授業構成案として、場面ごとに分類しておきたい。

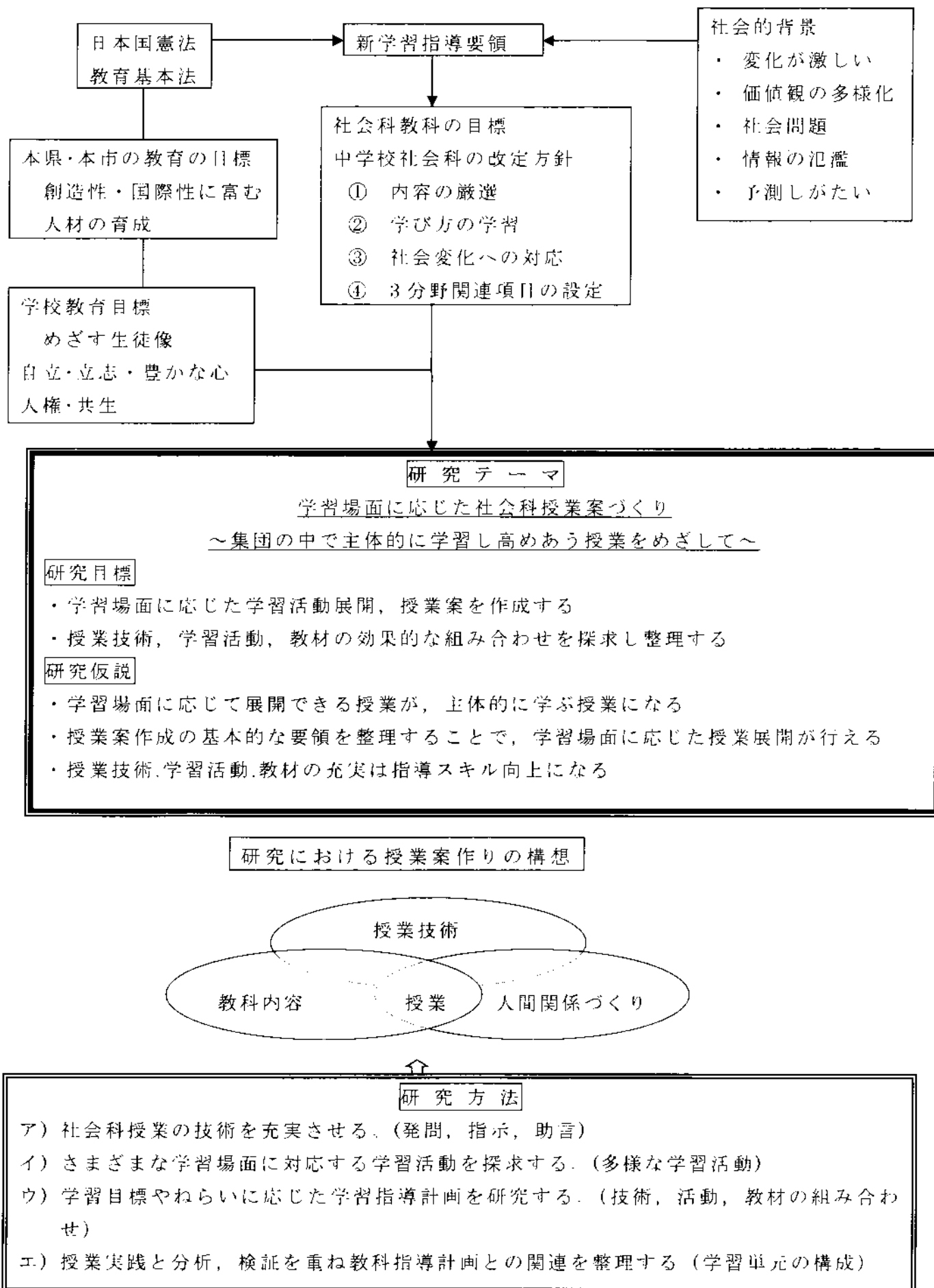
III 研究仮説

ア 学習集団理解や生徒理解をもとに、場面に応じた学習活動が展開できる授業、を行うことにより「生徒が集団の中で主体的に学ぶ」ことができる。

イ アのような授業案作成の基本的な要領を整理することで、さまざまな場面に応じた授業展開が行える。

ウ 授業技術、学習活動、教材を充実させることは、教師の指導スキル向上になる。

Ⅳ 研究の全体構想図



V 研究内容

1 研究内容の概要

研究は教科、授業技術、人間関係作りを基本研究とし、先行授業、検証授業、研究授業の3段階で進めることにした。

先行授業は、研究のイメージや内容、方法について、具体的な研究実践項目を絞り込むことを主な目的として行った。いくつかの先行研究や資料、実践例を参考に指導計画と授業案を作成して行うもので、「追試」ではなく、私自身が研究の出発点として位置づけられる「実践資料」と考えた。

検証授業は、先行授業（実践資料）から見えた成果や課題、可能性の中から、項目を絞り、研究を深めるもので、指導計画作成から授業案作成まで系統立てて行う。研究を具体的に進める実践活動として行う。

研究授業は、それまでの研究をもとに展開する継続的な個人研究の方法として位置づけ、以後の現場勤務のなかで続けていく。

このようなことから、今回の研究活動は、これまでの実践経験や授業指導案などを整理、改善し、私自身の「授業を中心とする教師活動のテーマ作り」としての性質を持つ。

2 教科授業案の作成

社会科の授業作成手順を、下図のように考える。普段、教師が密接に関わるのは教科指導計画の段階からである。

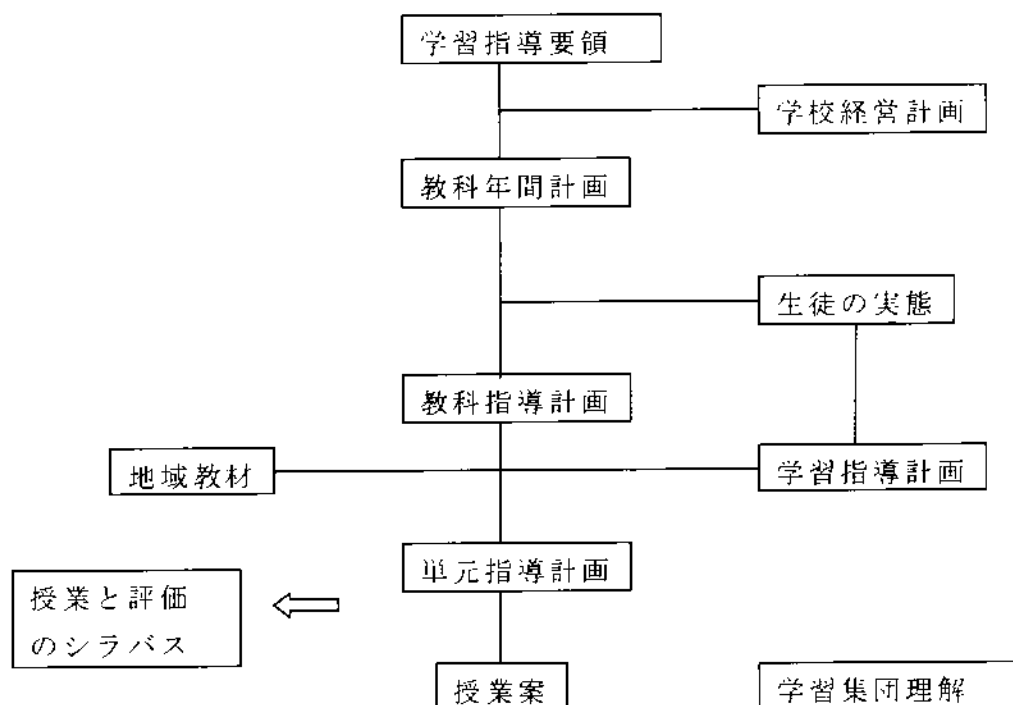


図1. 授業案作成までの手順

(1) 教科指導計画

「内容の精選」をどのように考えるか。

学習指導要領の「知識習得に偏らないような学習を充実するために、内容の精選を図る」ということは、社会科はそれだけ「習得すべき知識事項」が多いということである。これに「学習の過程を重視し、学び方を身につける学習の充実」ということを合わせ考えると、「既習学習や既得知識を活用しながら自ら学ぶ学習能力の育成を図る」となる。このことは、教育課程審議会の「中間まとめ」において、「・・・知識や提示された課題を調べる態度は身につけているが、それらの知識を基に様々な視点から・・・考察したり、・・・自分なりに考えて意見を述べたりする能力について十分でない面がみられる。」と述べたことをうけて、内容の厳選が図られていることを考えても、知識習得学習を減らし、学び方の学習を充実させるために内容を「厳選」したことが伺える。知識量が多いほど多面的・多角的な思考を行い易くなるだろうが、知識活用能力の育成を重視した学習指導に必要な知識・理解項目を精選し、見合った教材と内容を準備する、という観点で指導計画を作成しなければならない。具体的には、問題解決型学習や調べ学習などの作業的、体験的学習の中で身につけさせるべき、学び方、考え方、知識、表現力の具体的なものは何か、どれくらいの量か、そのためにどのような学習内容や教材を準備するか、といった指導目標や基本事項をおさえながら、時間（期間）配分や生徒の実態などを考え合わせて、指導計画を立てなければならない。その際には学習指導要領の中項目単位での編成が考えられるので年間を見通して行うことが望ましい。

(2) 地域教材の捉え方

地域や保護者の願う子どもの育成像やニーズは、身近な歴史や産業、地域の活性化と将来、住民の権利等々、教材開発や人材活用を行い取り入れていくことになる。

(3) 学習指導計画

ここでいう学習指導計画とは、子どもに学習させるもの、身につけさせたい力、など具体的な内容や項目の指導計画のことである。

これは二つあり、教科の持つ専門的な内容と学習を通して身につける能力の部分からなる。教師は、この二つを関連または融合させた学習内容や学習活動を計画する。そのときに「時間」の制約や「教材」の持ち味を考え合わせ、精選を行い、指導計画に編成していく。ただ、ここでいう「精選」されたものは、重要なもの、最低限のものとなる。学習指導要領は、共通に指導すべき内容であると中央教育審議会から「基準性」が明示されている。しかし、生徒の実態に応じて柔軟に展開できるように「精選されたもの」以外のものも準備はしておく。

(4) 単元指導計画の作成

教科学習として行うのだから、先の学習指導計画を単元に分けていく。細分化し、段階的な指導計画を立てていく。そのほうが学習する側も分かりやすいし、意欲が喚起され、学び続けようとするだろう。このことは『やる気を引き出す技術』（授業技術文庫）のなかで新巻氏が、達成できそうな小さな目標を設定し、それを積み重ねることがやる気を引き出す授業になると述べている。単元指導計画の段階でこれを特に留意したい。

(5) 授業展開案

授業は、教師の個性で行うものだと思う。子どもの好き嫌いや教師の力量がどうこうというより以上に、教師自身の人間としての信念や考えで行うものだと考える。一人の人間としてそのままぶつかるということでもない。「人間性を出した職人」として授業を行うのである。

私自身は、物事を定義づけたり、ネーミングしたりすることが好きである。思考や生き方において「事象」を自分なりに簡単に分類して整理する。まちがった認識や浅はかな認識のために恥をかいたことも多いのだが、また学習して修正すれば良いと考えている。これまでの授業を振りかえっても、一言感想や一言表現、風刺画、イラスト等を授業のまとめとすることが多い。また、「本日の授業のテーマ」なるものをよく提示する。生徒が1時間の授業について、一言でまとめることのできる授業展開や指導方法を考えていく。それが、教師にとっても生徒にとっても「授業の評価」が集約されると考えるからである。

(6) 学習集団理解（生徒理解）

指導案は同じでも、学級によって授業展開が異なってしまうことは多い。普段の授業では時間的にゆとりがないため、1つの指導案を学級の実態に応じて少し工夫を加え、授業展開するのが精一杯である。可能であれば、教材や教具も学級の特性に応じたものを準備したい。学習活動についても、個人レベルではさまざまな反応が見られるし、進度差も出て来る。

また、学習用具の忘れ物や意欲の強弱など、学習に向かう状況も同じでないことが多い。これについては、事前に対策が取れる場合（個別指導が予測できる）と授業場面で対応しなければならない場合があり、学習活動やワークシートなどに工夫をしておく必要がある。生徒個人や学習集団（学級、グループ）の状況を見極めながら適切な対応と授業展開が行えるよう、授業案作成の段階でできるだけことはしておきたい。

(7) 学習活動の提示と評価方法の提示（授業と成績のシラバス）

「社会学習は暗記中心」だと考える生徒は少なくない。生徒は、社会科の学力を先のように捉えているか、または受験のこともあり、そのような学習が中心になると考えているのである。そのために、授業者と生徒（保護者も含めて）で学習の目標にズレが生じ、学習活動の内容や成績にギャップが出てしまい、両者ともに不満を持つことがある。学習指導要領が重視する、学び方や考え方の育成、社会変化に対応できる能力、というものは、子ども自身では実感しにくい力であるし、学習において常に「正解」を求める生徒によっては、知識量が社会科の力と感じてしまうのである。

社会科は何を学ぶか、どのように学習するか、それで何を身につけるか、それがどのように役立つか、そのことが生き方にどのように関わるか、ということを、生徒と保護者に提示し、理解してもらうことが必要なのではないか。ゆえに、その趣旨に基づく授業や学習活動、評価方法と成績について提示することが授業づくりの第一歩だと考える。4月に「教科開き」「教科オリエンテーション」を行う理由がここにある。必要に応じて、各単元の学習ごとに行うこともあるし、学期の下旬ごろに確認することもある。学習主体である子どもに、学習の意義や目的、教科の概念をしっかりと把握してもらいたい。

以上のことから、單元ごとに学習指導計画と評価方法の提示を行い、授業時にも、学習目標や活動、評価方法を提示することが必要である。そうすることで、生徒が目標をしっかりと捉え、一時間の授業で主体的に学習を進めていくと考える。さらに、それを重ねていくことで、いつか「教師と子どもで学習活動と評価方法を共同参画する」こともできるようになる。また、それが真の「個が主体的に学習する授業」になると考える。

3 授業技術

(1) 授業技術の定義

まず、「授業技術」とは何か。資料を基に本研究での定義づけをしておく。

「授業をどう創り、子どもをどう動かすか」といった教師の「実践的な指導力」形成のハンドブックとして編纂した『授業技術講座〔基礎技術編〕』で、「教師の人的豊かさ・・職業人としての教師の使命感、倫理観・・深い学問的・専門的知識・・これらが凝縮され、教えることが指向されるとき『実践』となって表現されていく。この表現の形態が「技術」にほかならない。」¹という。また、向山氏によれば「教育技術とは、できるだけ少ない手間で、教えられる側に知識・技能などをねらいに沿って、身につけるようにする修練によって身につけた教える側の行為」²と定義している。

本研究では「授業技術」を「授業で、ねらいを達成するため教師が行う活動」と捉えたい。教材開発や資料選択などを含めず、授業場面での活動としたい。特に「発問」と「指示」について研究を進める。なお、「学習活動」や「評価」は教材開発・指導計画の研究で関わらせていく。「授業案作り」自体は本研究の大きなテーマであるから、研究全体を通して考えていく。

(2) 発問

授業における「発問」がどのような役割を持つか、どのくらい重要であるかは、「発問」ない授業というものが成り立たないことを考えれば、「発問」は生徒を授業目標に導く手段として欠かせないものであることが分かる。授業者なりにその意義をしっかりと持っておくべきであろう。

「発問」に関する資料を探すと実に多くの研究実践や文献が見つかる。授業における「発問」の意義や作成の留意点については様々な説明がされているが、概ね以下のようなものになると思われる。

ちなみに、「発問」とは、

- ・子どもと教材を出会わせる接点が必要である。これが発問である。³
- ・意図的な働きかけ、興味関心を集中させる中心的な方法、思考活動を促す、教材を生かすもの。⁴

学習活動というものは、学習者自身に、その出発点である。なぜ、何だろうか、もっと知りたい、といった疑問や知的好奇心があり、では次は、他は、本当か、などの「疑惑」も存在するだろう。このような思いを引き出すことが「発問」であり、より高次の学習にするため「発問」が意図的に行われるものである。授業は「発問」の目的と順序で展開方向を決定し、「指示」により学習活動を進めていくという構成だと考える。よって、本研究では、「発問」を「授業時における教師の基本的な指導（活動）」とする。

(3) 発問づくり

発問づくりについて、先行研究された資料（原則、基本、留意点等）を基に、構造化を図ってみた。授業の流れを想定し、配列と目的に分けて整理してみた。

配列の留意点（発問内容や教材）

導入

- ①丁寧かつ分かりやすいもの
- ・変化や違い等、特性の顕著なもの
- ・既習内容や既得知識

展開

- ②教材をより深く分析・検討・理解させる視点を含むもの
- ・比べることができるもの
- a 無知であることを悟らせるもの
- b 否定的逆説な意味を持つもの
- c 意表をつき、はっとさせるもの
- d 変化と緊張をつくりだすもの
- e 探究心をあおりだすもの
- f 思考に抵抗と対立を与えるもの

発展・まとめ・

- ③学習した事柄すべてを総動員して考えられるような発問を、授業の終わりにする
- ④まとめでは、より発展し、追及していけるような課題的なもの

目的に近づく留意点（発問の方法）

学習目標や教材をとらえるために

- ⑤「本質」でなく、「現象・事実」を問う
- ⑥知覚語で問う
- ⑦発見させる言葉で問う
- ・量を多く、問う

自発的な学習課題・意欲を起こすために

- ⑧比べる発問をする
- ⑨選択させる言葉で発問をする
- ⑩ゆさぶり発問をする
- ・生徒に発問させる

共通の認識を構築するために

- ⑪解決・追求するための糸口を含んだ発問をする
- ⑫選択肢をつけた言葉で発問をする
- ・「質」を問う
- ・一言でまとめられるように問う

発問により、意図的に授業展開を操作することが、可能だが、それは生徒の反応が予測できるという前提のうえである。予想外の反応や展開が出てきたとき、教師は継続か修正、または変更の判断をする。そのための「発問」も準備しておくことが必要である。

発問は計画的、段階的に目的を持って行うが、その中でも一つだけ、最も重要なもの、を決めて発問づくりを行う、それが授業の主たる学習活動につながるものになる。

①～⑫は『社会科発問づくりの上達法』（西尾・明治図書）で、発問原則⁹として説明されており、a～fは、『ゆさぶりある社会科授業を創る』（北俊夫・明治図書）で、山崎林平氏の「ゆさぶり発問の要素」¹⁰、として紹介している。これらを自分なりに、授業の流れをイメージして・項目を加えて、粗く構造化した。研究を進めながら整理していきたい。

(4) 指 示

「指示」についても多くの研究文献があるが、指示を行う際の技術的な留意点が共通して示されており、以下のようなものである。

- ・ 一時に一事の指示を行う
- ・ 簡単、明確に指示を行う
- ・ イメージを利用する（持たす）

『指示の技術』授業技術文庫のなかで、根本氏は、指示には大きく分けて二つあり、子どもを動かす技術と発問との組み合わせがあるという。¹ 本研究では、「指示」を、「学習活動を進めるための働きかけ」と捉える。授業場面での「指示」は、学習活動と直接に関わるものであるから、活動内容と合わせて授業実践を基に考えていく。

4 人間関係づくり

授業を通して育成したい人間関係づくりとはどのようなものか。

中央教育審議会による「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」（答申）は、生きる力の一つの「豊かな人間性」として、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など」と、個人による他者との関係づくりを示している。

社会科目標の「公民的資質の基礎を養う」は、個人の育成すべき目標であるが、前にある「国際社会に生きる民主的、平和的な国家の・社会の形成者として」という部分から考えていくと、「広い視野を持って、他者と協力して社会を形成する」と捉えることができる。

学校教育に関する意識調査（平成 15 年文部科学省）で、「生活学校生活で身につけてほしいこと（保護者・教員）」のトップは、「友達をつくったり、自分のまわりの人々などと仲良くつきあったりするなど社会の一員として必要な幅広い能力」となっている。また、企業の教育・人材に関するアンケート調査（平成 15 年経済同友会）の「ビジネスの基礎・基本能力として、今後必要になると思われるもの（企業経営者・人事担当者）」の中に、自己表現力、交渉力、人間関係を円滑にする力、人脈形成力といったものがある。² 私自身の教師体験から見えた一般的な生徒の人間関係の特徴としては、以下のようであった。

- ①個人個人の活動に寛容または無関心である。
- ②リーダーの育成が難しい。
- ③場面的、都合的な友人関係が多い。

①は、個性を認め合えるという点では良いのだが、問題となるのは、何かを協力して作り上げる、成し遂げる場面である。例えば、行事テーマを作る際にいろいろ出てきた案を、即多数決を求めたり、つなぎ合わせたりして解決しようとする。検討したり、批判したりして、高めあう中から生み出すことをしたがない。生徒に言わせると、せっかく意見を出してくれたので否定せず、取り入れようとするらしい。リーダーの仕事は調整であり、②のようなことが起こってくる。あれでも良いし、これでも良い、となれば、リーダーの存在は薄いものになろう。リーダーの資質というより、リードされる側の問題を感じる。このような土壌の中で、プライベートの人間関係があり、帰宅後の友

達、学級での友達、部活動での友達というような場面的、都合的な関係になりやすい。以上のことから、本研究での人間関係作りを次のように考えたい。

公民的資質を、「異質なものから共通的なものを生み出せること、何かを協力して作り上げること、学習をより高次なものに高めあえること」と捉えそのような人間関係作りを育成する授業案作成を研究する。

5 先行授業

先行授業を四つの指導案で6回行った。これにより、取り組むべき研究の具体的項目が明確になった。この具体的項目はそれぞれ関連するものであるし、相互作用もあるが、研究の足がかりのため便宜上、以下のように整理してみた。

ア 基礎的・基本的事項（最低限の学習事項）をどのように抑えさせ、確認するか

イ 学習目標に迫れる教材の選択や開発

ウ 教具（ワークシート、ノートなど）と教材の活用関係

エ 指導内容、学習事項の精選と配列

オ 発言、発表を促す（活発にする）課題（活動）と提示方法

カ 学習への興味・関心を高める工夫

キ 学習を促す発問や明確に伝わる指示の工夫

ク 授業構成の持ち味を生かす展開

ケ グループ構成の工夫と活動指示の仕方

コ 学習準備が整っていない（忘れ物、無気力）生徒への対応

これらについて研究を進め、授業実践により検証を行う。

6 検証授業

先行授業から得た具体的項目を検証課題として、授業案を作成する。いくつかに重点をおいて取り組む。また、学校現場にある指導計画に基づいて、内容を選択し作成していくが、可能であれば中項目の再編を図りながら行いたい。

（1）検証授業1

1月22日（金） 2年5組（1校時）と2年6組（2校時）

単元名：「明治時代の文化」（近代文化の形成）

学習指導要領 社会科 歴史2 （5）近現代の日本と世界

中項目エ 近代産業の発展と近代文化の形成の後半部分

検証課題①（指導内容、学習事項の配列）

文化学習の「気づき」を線として、産業発展学習へつなげる

学習指導要領では、近代産業発展を理解させた上で、その産物として近代文化とその形成を学習することと「気づき」を重視した学習過程が示されている。しかし、中項目段階までの編成が許されているので、学習指導の流れを変えることにした。「気づき」から「理解」へとつなげていく。

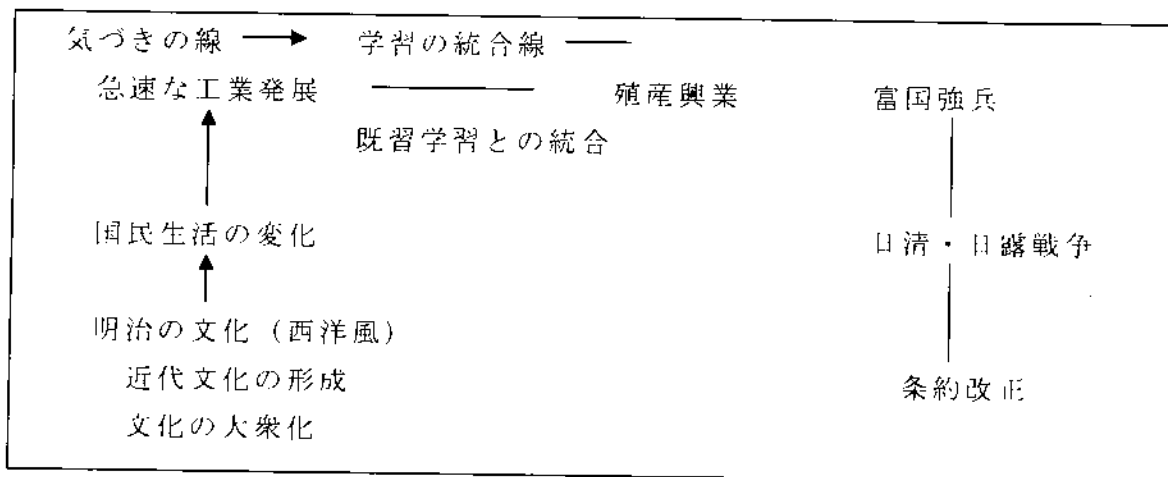


図2. 学習指導計画のイメージ図

授業展開と検証課題

場面	授業の展開	検証課題と取り組みの意図
1 集団理解	学習目標の説明 既習学習事項の質問	
2 導入	教材の紹介 複製写真、広告ビラ、錦絵	検証課題②（学習目標に迫れる教材開発） 文化学習にはその時代の流行、広告が有効 教材が、学習の基本事項、発展学習事項を 持っているか、学習活動に適合するか
3 課題学習	課題の指示（発問と同質） ～だと思ふことを見つけな さい。	検証課題③（学習を促す発問と学習課題の指示） 思考と作業をあわせた学習活動は楽しい
展開判断	5 組 グループでの話し合い 6 組 個人取り組みの延長 と充実（6 組）	研究課題（学習場面に応じた授業展開） 基本課題の取組状況で判断し、到達目標 を再設定する（記入量を目安にする）
4 高めあい	5 組 グループごとにまと めて発表し、全員で 検討（質問、解説等） 6 組 グループで協力し、 数多く発表、同じも のは避ける	検証課題④（授業構成の持ち味を生かす展開） その1 学習の高めあいは、実態に応じて方法を 変える
6 まとめ	5 組 教師がまとめへ導く 6 組 他者の発表を書きま とめる	その2 学習のまとめは、授業の山場（主活動） に応じて行う

授業分析、検証：顕著にあらわれた事項として

検証課題②から 視覚で捉える資料は、興味をひくもの（面白く分かりやすい）の中に、考えさせる（深読みさせる）ものが一つ以上あると良い。

検証課題③から 思考や創作部分がある作業学習は、生徒自らより高次なものを求めて学習する傾向がある。

その他

検証課題①は、複数時間の指導に関わるもので、継続実践を通して考えたい。

検証課題④は、複数事例の研究でまとめていきたい。

（２）検証授業 ２

２月 20 日（金） ２年 4 組 ３校時

検証の重点

ア 社会科学学習への興味・関心を高める指導

いくつかある社会科学学習の楽しさの中で、「価値の創造」を味あわせたい。生徒が自分なりに考え生み出したものに「価値」つけ、それを自他共に認識しあうことは、「創作」の喜びであり、創作物（学習成果）の習得、教養化になる。それが知的好奇心の継続、学習意欲高揚になるものであろう。

授業では、生徒自身が重要だと思う年を選び出す。その理由は各個人が持っており、それらを認め合うことで生かされ则认为る。

イ 高めあう人間関係作りを育成する学習指導

各自の学習成果を発表し、他者の意見や質疑に耐える場面を作りたい、できれば生徒相互「価値観」のぶつかりを期待したいところである。その際に、言葉づかいや表現方法の指導を教師でしっかり行う。

単元名：「20 世紀の日本」

学習指導要領 社会科 歴史 ２内容（５）近現代の日本と世界

中項目キ及びク より編成したもの

検証課題①（指導内容、学習事項の精選と配列）

近現代の日本は、概観的な通史学習を行うことで、史実学習が進みやすい

現在は 21 世紀であるが、生徒たちは 20 世紀に生きた人間でもある。歴史学習の出発点は、現在である。今は前につながり、前は過去につながる。そして過去は歴史として学習されるが、細切れの史実学習では全容をつかみにくい。特に、変動の大きい第二次世界大戦前後、現代生活の基盤である経済復興は重要であり、現在とのつながりを生徒にしっかり持っていてほしい。歴史（社会科）学習は生き方に関わるものであるということを理解させたいと考えた。また、興味・関心の高まりも期待できると思う。

近 代 現 代	明治時代の近代化・・・文明開化，和魂洋装 殖産興業	西欧列強のアジア 進出，列強対立
	大正時代の民主主義・・・大正デモクラシー 自由民権運動	日本の列強化 列強対立
	昭和時代前期の国家統制・・・国家総動員法 第二次世界大戦 大東亜共栄圏	ファシズム化 連合国関係
	昭和時代中期の復興・・・民主化政策，経済成長 社会問題	冷戦対立 代理戦争
	昭和時代後期の安定期・・・安定成長，ジャパンマナー 経済大国	第三世界の 国際進出
	平成時代の新しい国際化・・・多様化，グローバル化	冷戦終結 情報化世界

図 3. 学習内容の概観図

授業のねらい

- ア 生徒が日本の近現代について通史的に概観学習を行う
- イ 研究についての検証を行う

学習項目と評価

興味・関心

- a 課題に取り組む
- b 各年の出来事を記入する（1980 年以降項目）

意欲・態度

- c 時代を 2 分する，変化の年を見つける
- d 分けた時代，発見した年にネーミングする
- e 他者と情報交換や検討をする
- f 他者の発表について，自分の意見を投げかける

資料活用

- g 各年の出来事を記入する（1979 年以前項目）

表現能力

- h 自分の考えや学習したことを発表する
- i ネーミング及びその理由の説得性

社会的思考・判断

- j 戦前戦後で時代を 2 分する
- k 他者の発表について，自分なりの見解を持つ
- l 時代を 4 以上に分ける
- m 時代区分およびネーミングの独創性

知識理解

- n 時代を3以上に分ける
- o ネーミングの理由が資料に基づいている
- p 時代区分理由及びネーミング理由の妥当性、客観性

研究課題の取り組みと評価（検証授業評価と分析のために）

検証課題②

社会科学学習への興味関心を高める

- A 生徒全員が資料1, 2で学習している
- B ワークシートへのまとめを生徒全員が取り組む
- C 生徒が最終課題まで記入する
- D 生徒が課題学習を楽しむ
- E 教師が授業を楽しむ

検証課題③

高めあう人間関係作りを育成する学習指導

- F 生徒が他者との情報交換、検討を行う
- G 生徒相互の発表に反応する
- H 教師がD, F項目を引き出す、指導している

学習集団（学級の実態や個人の実態）理解に基づく展開予測と対応案

2年4組は、個人での課題取り組みが良い。ただ、一斉授業時の発表や検討はあまり活発ではない。また、個別指導を要する生徒が5人おり、基本課題取り組み時には先ずその生徒たちへの支援を行うことが多い。

このようなことから、基礎的・基本的な学習活動の状況により、学習の主活動を決定する授業展開を3案〔基本、ネーミング、年代分け〕準備した。個別的な学習活動が主体となる、「ネーミング案」の活用が予想されるが、課題の取り組み状況で展開判断を行いたい。

授業展開案（基本）

場 面	教 師 の 活 動	生 徒 の 活 動	備 考
1	授業の説明（シラバス） 学習目標 学習方法 評価方法	大正期から現代までを概観する 資料を基に時代の特徴をつかむ 現代までの歴史変遷を概観した 高めあいをした	
2	指導 1 ①教科書、資料集を参考に、出来事を記入してください。	資料 1 に、出来事を記入する。 第一次世界大戦、米騒動など その他歴史上の事件や問題 （全部記入できなくても良い）	具体例提示 机間指導 教科書の活用
3	指導 2 基本事項の指導と独創性の激励 ②大正期から現代までを、理由をつけて 2 つの時代に分けてください ③大戦終結までを近代、大戦後から現代として扱います。 ④別の分け方をしたものがあれば紹介してください。	社会や人々の生活が大きく変わった第二次大戦前後を捉える 資本主義、民主主義の形成期と確立期を理解する 自分なりの判断にも根拠があり、間違いではないのだ	机間指導 資料 1 の活用 ワークシートの整理 一般定説と独創性のある仮説
4	指導 3 価値の創造と人間関係作り ⑤時代を各自の判断で、理由をつけて、自由に分けてネーミングしてください。 ⑥いくつか紹介してください。	歴史上の共通点、相違点はないか、自分の生まれた年とその前後はどうなっているか・・・ ゲーム時代、親の時代・・・ 自由に黒板にネーミングを書き増やす	机間指導 分け方の視点 ネーミングの助言
5	指導 4 学習の共有化、高めあい ⑦ネーミングに質問や意見はありませんか。	思考判断の相違、表現方法の豊かさ、討論、応答などを楽しみながら学びあう	コーディネータ的な導き
6	まとめ 今後の学習について予告と助言	今後の史実学習の取り組み 社会科学習と生き方への活用	

授業展開案 1（ネーミングを重点に）

場 面	教 師 の 活 動	生 徒 の 活 動	備 考
1	授業の説明（シラバス） 学習目標 学習方法 評価方法	大正期から現代までを概観する 資料を基に時代の特徴をつかむ 現代までの歴史変遷を概観した 高めあいをした	
2	指導 1 ①教科書、資料集を参考に、出来事を記入してください。	資料 1 に、出来事を記入する。 第一次世界大戦、米騒動など その他歴史上の事件や問題 （全部記入できなくても良い）	具体例提示 机間指導 教科書の活用
3	指導 2 基本事項の指導と独創性の激励 ②国民の生活が一変した年はいったと思いますか。 ③大戦終結までを近代、大戦後から現代として扱います。	社会や人々の生活が大きく変わった第二次大戦前後を捉える 資本主義、民主主義の形成期と確立期を理解する	机間指導 資料 1 の活用 ワークシートの整理 一般定説と独創性のある仮説
4	指導 3 価値の創造と人間関係作り ④各自の判断で、大きな変化があった年を見つけてください。 ～の年と書いてください。 ⑤いくつか紹介してください。	自分なりの判断で、根拠を持って見つける ゲーム出現、誕生年・・・ 自由に黒板にネーミングを書き増やす	机間指導 発見の視点 ネーミングの助言
5	指導 4 学習の共有化、高めあい ⑥ネーミングに質問や意見はありませんか。 ⑦これらを、いくつかに分けて～時代とネーミングしてください。	思考判断の相違、表現方法の豊かさ、討論、応答などを楽しみながら学びあう	コーディネータ的な導き
6	まとめ 今後の学習について予告と助言	今後の史実学習の取り組み 社会科学習と生き方への活用	

授業展開案2（年代分けを重点に）

場 面	教 師 の 活 動	生 徒 の 活 動	備 考
1	授業の説明（シラバス） 学習目標 学習方法 評価方法	大正期から現代までを概観する 資料を基に時代の特徴をつかむ 現代までの歴史変遷を概観した 高めあいをした	
2	指導1 ①教科書、資料集を参考に、出来事を記入してください。	資料1に、出来事を記入する。 第一次世界大戦、米騒動など その他歴史上の事件や問題 （全部記入できなくても良い）	具体例提示 机間指導 教科書の活用
3	指導2 基本事項の指導と独創性の激励 ②生活の様子やその年の様子を推察して、2つ時代に分けてください ③大戦終結までを近代、大戦後から現代として扱います。	社会や人々の生活が大きく変わった第二次大戦前後を捉える 資本主義、民主主義の形成期と確立期を理解する	机間指導 資料1の活用 ワークシートの整理 一般定説と独創性のある仮説
4	指導3 価値の創造と人間関係作り ④各自の判断で、いくつかの時代に分けて、～時代と書いてください ⑤いくつか紹介してください。	自分なりの判断で、根拠を持って見つける 戦争時代、小学校時代・・・ 自由に黒板にネーミングを書き増やす	机間指導 発見の視点 ネーミングの助言
5	指導4 学習の共有化、高めあい ⑥年代順に、整理して各時代の特性を考えてください ⑦それぞれの時代について、質問や意見はありませんか	思考判断の相違、表現方法の豊かさ、討論、応答などを楽しみながら学びあう	コーディネータ的な導き
6	まとめ 今後の学習について予告と助言	今後の史実学習の取り組み 社会科学習と生き方への活用	

ワークシートの解答より分析
生徒数 34 人 欠席 2 人 提出 28 人 未提出 4 人
時間終了後の回収となり、特に個別指導を要する生徒 2 人を含めた 4 人が未提出

・時間がなくとも、未提出者を生み出してはいけないだろう、指示が確実に伝わっていない。

課題 1：重要だと思う年、変化の大きい年を見つけてネーミングして内容を書く

	ネーミング	内 容
未記入	10 人 (35.7%)	10 人 (35.7%)
1 個	4 人 (14.2%)	4 人 (14.2%)
2 個	11 人 (39.2%)	7 人 (25.0%)
3 個	0 人	0 人
4 個	1 人 (3.5%)	2 人 (7.0%)
5 個	3 人 (10.5%)	0 人

データ 1
未記入の理由
・資料 1・2 での学習作業が中心であるためそれに記す生徒が多かった。
・まとめの時間不足

ネーミング一覧（同名あり）

1945	民主化
1946	考えの改正
1972	沖縄の日本復帰 見返り
1979	コンピュータゲーム
1989	自分が生まれた 平成になった ゲーム
1990	自分が生まれた 不景気 失業問題
1994	同情するなら金をくれ 不景気 野球
1996	たまごっち
1999	Y2K 失業問題
2000	20 世紀最後 沖縄サミット ミレニアム

データ 2
・生徒自身が生きた年代を捉えたものが多い
・復帰関連と不景気関連が多い

学習のまとめ

(1) 20 世紀はどんな時代だったと思いますか。
記入 24 人 (85%) 未記入 4 人
内容の一覧（複数同内容あり、要約あり）
・いろいろなものができた
・当たり前のものできはじめた
・いろいろなことがあった
・新 3C など便利なものができた
・現代化
・変な時代
・変化が多い時代
・戦争もあった時代
・お金に関して変化のあった時代

データ 3
・抽象的表現の中で、具体例をあげるもの（戦争、不況）が多い
・現代との関わりをとらえている
・変化、変遷をとらえている
・平和、安定を意識したものあり
・国際的な視点がある

- ・日本が強者から弱者へと移った時代
- ・後半からはみんなが楽しめる時代になった
- ・おもしろい言葉がいっぱい出て楽しそうな時代
- ・21世紀に大きな影響を与えた時代
- ・第二次大戦後は人々が楽しめるようなものが多くなった
- ・近代化によって、便利にもなったがその技術が戦争にも利用された
- ・良くもあり悪くもあり、今の日本にとっても影響を与えた時代

(2) 他者（他の生徒）の意見や話し合いの中で印象に残ったことは何ですか

記入 24 人（85%） 未記入 4 人

意見をとらえたもの 17 人

沖縄が日本に復帰

同情するなら金をくれ

いいことや悪いことがいっぱいあった

バブル崩壊

不景気の年

リストラ

失業問題

長女誕生

消費税の話があった

生徒自信の感想もの 7 人

流行語が懐かしい

なし

ずっとある言葉だと思っていた

あらためて戦争はいけないと思った

みんなすごいこと書いていた

データ 4

- ・生徒自身による説明がなかったの
で、言葉そのものが影響?
- ・復帰と経済及び不況の側面への関
心がとても強い(生徒は社会事象
に無関心でない)
- ・生徒各自なりの変化(高まり)
が幾分感じ取れよう

(3) 学習(授業)の感想を書いてください

記入 26 人(96%) 未記入 2 人

内容一覧(原文)

ア たのしかった、おもしろかった

イ 他の先生とかがきて緊張した。

けっこう楽しかった

ウ 毎回こんな授業ならいい。

エ とても楽しかった。優志先生の授業が

できておもしろかった

オ おもしろかった いろいろ調べることが

できてよかった

データ 5

- ・ア～エは、授業全体についての
感想と見ることができる、内
容、活動、手法、雰囲気など

データ 6

- ・オ～ツは、社会科学習について
の感想と見ることができる歴
史学習、学習活動など

カ	さいしょはめんどくさかったけどし らべてみたらおもしろかった
キ	今のじゅぎょうは、自分でいろいろ考え られて楽しくできました
ク	ちょっとなつかしかった。自分で調べき れてよかった
ケ	勉強になった
コ	知らないことがわかった
タ	むずかしかったけどわかった
チ	日本のかわり方がわかった
ツ	ビックリする事だらけだった
テ	りゅうこうごがウケた
ト	最近のことについて学んだのでとても みこみやすかった
ナ	今までの授業で一番たのしかった
ニ	近い時代をふりかえるのはおもしろかった
ヌ	流行語・出来事を調べて、今自分達が使って いる言葉や物がこんな前からあったんだなー てびっくりしました。なつかしいものとかも あって楽しかったです
ネ	いつもと変わりなかった
ノ	いつもと違う授業のやり方なので、ちょっ と変なカンジだった
ハ	いみわからなかった
ヒ	いみよ

データ 7
・ク、ニ、ヌでは自分史についても 考えただろう予想できる セルフカウンセリング的な面

データ 8
・テ～ヌは教材への興味、関心の 高まりとして捉えられる

データ 9
・ネ、ノは対照的であるが、これ までの授業との関わりで捉え たい

データ 10
・ハ、ヒは指導について、教師の 猛省が必要。(2人とも資料2を 楽しそうに見ていた、助言不足)

検証授業の反省会より

授業展開案1（ネーミング中心）を行った。

授業者の反省

- A 穴埋め学習に集中する傾向があった。
- B 資料1は取り組む時間があったが、資料2は無理があった。
- C 2人の生徒にはもう少し支援が必要でなかったか（資料2を楽しそうに見ていた）。
- D 黒板の活用ができなかった理由は何か。
- E 生徒発表用カードは、準備の不十分だった。
- F まとめはワークシートだけで良いか疑問が残る。
- G 活動の指示、表現の研究が不足（補足的な説明が多い）。
- H 学級理解、生徒理解を十分におさえて、展開案の中に工夫が必要だった。

宮城康人主事より（指導助言）

I 穴埋めの量が多いのではないか。

J 活動を促すワークシートの構成、教材作成をもっと研究せよ

K 授業の構成、方向性は良い。

研究教員 照喜名幸子先生、米城瞳先生より

L 子供たちの意見を取り上げている。

M 目立ちたがりの生徒をどのように指導するか。

指導係長 新垣英司より

N 資料（教材）の開発の視点が良い。

O 視覚に訴える資料（絵、写真）があった方が良いのではないか。

P 西暦で示した通史視点は見やすい。

課題の検証

（1）社会科教科への興味・関心を高める

- ・流行語は身近な社会事象である。それも近いものほど親しみやすく、生徒たちの反応は良かった。今後も「歴史学習は、今現在を出発点とし、未来を見つめるために学習する」という目標かつ手法に耐えうる教材開発が必要だろう
- ・「できた」「わかった」という達成感を、教師の説明や評価より、生徒相互の学習活動を通して感じ取る、すなわち学習の価値を自信で感じることで意欲を高める。価値の創造は、社会科学学習目標である。活動、手法にとりいれておく必要がある。

（2）人間関係作り

- ・教材や活動を通して話し合いをする姿が見られたが、説明や思いを話す時間がなかった。黒板に張り出したものを見て、生徒各自で考えただけであった。学習をより高次にする意味でも確実に、検討、共有に時間を取る必要がある。

（3）研究課題に関わるその他の事項

- ・1989年からは年毎に流行語を提示した。それにより、自身の過去を振り返る（セルフカンセリング）生徒もいた。
- ・出来事挿入を学習の基本事項と捉え、時間を取ったが、その分高めあいや主課題に取り組む時間が削られた。授業全体のコーディネートを考えると、時間配分、段階的指導などの課題が残った

（4）その他

- ・表記方法（特にワークシート）で漢字使用を日ごろから指導しておく。
（今回、ひらがなが多い理由として時間的な制約が考えられる）
- ・「学習を高めあう活動」について、場作り、方法、生徒の意欲高揚など新たな課題が見えた。

VI 研究のまとめ

現在まで（研修期間内）のまとめを行っておく。（研究は今後も現場実践で継続する。）

1 具体的項目の取り組み成果（総括して整理してある）

（1）社会科学習の授業づくりは、教材の開発が重要である

学習への入り口と通路が興味・関心を高めるものであれば、生徒は自主的かつ発展的に学習する。学習の過程で、基礎・基本的期事項を学び同時にそこに好奇心が出てくるならば、生徒は学び続けるだろう。社会科学習の楽しさは、入り口が広く身近な題材の多さであるが、知識重視の学習がこの魅力を削いでいたのではないかと感じた。学習事項をあらゆる視点で捉える教師の目が、好適な教材開発を可能にすると思う。

（2）発問により授業展開が決定し、指示により学習活動が深まる。助言がそれらの潤滑油となる。

発問は授業目標（ゴール）を向いており、展開の修正、変更はここで行ったほうが授業としてまとまる。指示は学習過程（ルート）を踏ませるもので、活動内容に見合うよう行う。また、必要に応じて助言を入れる。このような関係と関連で構成されたものが「分かる授業」になると感じた。

（3）指導計画は、学習事項と教材配列の組み合わせで考える。

教科書中心に内容の精選を行うと、一単元、1授業が単調になりやすい。学習事項の範囲や量、指導時間といったものが、学習指導要領の中項目段階まで広げて考えることで、生徒の実態に応じた授業、教師の相違工夫（個性を生かした）で授業が組み立てられる。

（4）授業時の学習活動は、内容を段階的に構成し、学習集団理解（生徒理解）に基づく配慮を入れる。

基礎、基本的な内容を前半に、その充実や定着を図るものを後半に主活動として設定すると、「参加する授業」となりやすい。後半はまとめや発展的内容の活動を準備することにより、個人差や個別の対応も行いやすい。また、ワークシートや資料、教具には活動促進の工夫と学習準備ができていない生徒に対応できる工夫も入れておく。

2 研究仮説への成果と課題

（1）学習集団理解や生徒理解をもとに、場面に応じた学習活動が展開できる授業を行うことにより「生徒が集団の中で主体的に学ぶ」ことができる。

【成果】

①授業での基本展開案と応用的展開案を準備することで生徒の学習状況に応じた（学習集団理解に基づいて）学習目標へのアプローチが行いやすい。それにより生徒が主体的に学ぶことができた。

②基本展開で学習についての共通認識を持たすことで、応用展開では生徒による高めあい学習が行いやすい。

（このような学習訓練を通して、良い人間関係が育成できるのではないか）

【課題】

- ①学習場面で、後半の展開が異なるということは、まとめや評価の規準が異なる場合があり、評価自体の客観性や格差が起こらないかという懸念があるだろう。
- (2)「場面に応じた展開案を持つ授業案」作成の基本的な要領を整理することで、さまざまな場面に応じた授業展開が行える。

【成果】

- ① 指導計画における単元設定を、学習指導要領の中項目段階で行うことで無理のない学習内容の精選が可能となり効果的な教材開発が可能となる。教科書は「重要学習資料」として、生徒が積極的に活用する。
- ② 授業を大きく2段階（基本、応用）に構成することで、授業時の指導と評価項目が明確になる
- (3) 授業技術、学習活動、教材を充実させることは、教師の指導スキル向上になる

【成果】

- ① 授業を「発問」「指示」「助言」の3点で分析し、見直すことができた。
- ② 思考や創作をともなう学習活動は生徒の学習意欲を高めること、その学習成果を「作品」として生徒自身が自己評価できることを感じた
- ③ 教材を捉える視点が広がった。また、教材開発が教師自身を社会人として成長させるものであること、それを含めて教材開発が楽しいと感じた。
- ④ 指導技術の融合や応用、学習活動と教具の連携について考えが深まった。

【課題】

- ① 今後は「助言」について研究を加える。

VII 研究報告を終えるにあたり

学校では、毎日が研究と実践の繰り返しで、それらを整理し系統的にまとめたりすることはほとんどできず、資料だけが積み重なるばかりでした。今回、まとまった時間を頂いて研究を行うことで、教師活動について、これまでのまとめができたことと今後の目標を明確にできたことは私自身の大きな財産のとなりました。学校現場に戻ってからも今回の研究成果を基盤とし、研究を続けて生きたいと思えます。

このような機会を与えていただきました普天間中学校の山城正春校長先生、宜野湾市教育研究所の宮城勇孝所長に厚く御礼申し上げます。また、ご多忙にもかかわらず研究活動にご助言とご指導をいただきました宜野湾市教育研究所の新垣英司研修係長、中頭教育事務所指導主事の宮城康人先生に感謝申し上げます。

最後に研究活動にご理解をもって協力、支援していただきました、普天間中学校職員、はごろも学習支援センターのみなさん、研究教員の照喜名幸子先生、米城瞳先生、ありがとうございました。謝意を表し、研究報告を終えたいと思えます。

《引用文献》

- ① 東洋・中島章夫監修、1988、刊行のことば、『授業技術講座 [基礎技術編]』ぎょうせい、p ii
- ② 向山洋一、1991、『教育技術入門』授業技術文庫、p 32

- ③ 有田和正, 1988, 『社会科発問の定石化』明治図書, p 14
- ④ 西尾 一, 1989, 『社会科発問づくりの上達法』明治図書, pp9—18
- ⑤ 西尾 一, 1989, 『社会科発問づくりの上達法』明治図書, pp93・96
- ⑥ 山崎林平, 1976, 「授業における『ゆさぶり』発問とは何か」『社会科ゆさぶり発問』明治図書 「ゆさぶり発問の要素」として, 北俊夫, 1991, 『ゆさぶりある社会科授業を創る』明治図書, pp9—10 のなかで引用紹介したもの。
- ⑦ 根本正雄, 1991, まえがき, 『指示の技術』授業技術文庫
- ⑧ 中央教育審議会(答申)「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」関連資料 <http://www.next.go.jp/>

【参考文献・資料】

- ・文部科学省『中学校学習指導要領』(平成 10 年 12 月) 解説 一社会編一
- ・斉藤喜博『授業』 国上社
- ・浜上薫『発問づくりの技術』 授業技術文庫
- ・新牧賢三郎『やる気を引き出す技術』 授業技術文庫
- ・長谷博文『個別指導の技術』 授業技術文庫
- ・明石要一『子どもウォッチングの技術』 授業技術文庫
- ・「モノグラフ・中学生の世界 VOL.65」<http://www.crn.or.jp/LIBRARY/CYUU/VOL650.HTM>
- ・文部科学省HP 初等中学教育 <http://www.next.go.jp/>
- ・『悠』～特集：子どもの集団力をどう生かすか～ ぎょうせい 2003.7
- ・岡坂慎二 『グループ学習の技術』授業技術文庫 1991
- ・村山泰弘 『遅れがちな子の指導技術』授業技術文庫 1991
- ・高橋正和 『学習形態の活用技術』授業技術文庫 1991
- ・塩見邦雄 『こどもの学習意欲をたかめる』北大路書房 1994
- ・千石保 「『まじめ』の崩壊」サマイマル出版 1991
- ・佐伯胖 中西新太郎 若狭蔵之助 『フレネの教室1 学びの共同体』青木書店 1996